

食道がんの男性患者 アルコール依存3割

食道がんになった男性の約3割にアルコール依存症の疑いがあることが、京都大や国立病院機構久里浜医療センターなどのグループの研究でわかった。19日、札幌市で始まった日本癌学会で発表した。飲酒が食道がんになりやすくなるとの報告はあるが、食道がん患者にアルコール依存が多いことを示したのは初という。

京大など調査

2005～10年、全国16施設で早期の食道がんがわかり、内視鏡でがんを切除した279人の男性について、飲酒する頻度や飲み始めてやめられなかった頻度などを聞く世界保健機関のテストを実施した。

その結果、29%はアルコール依存症の疑いがあるとの結果が出た。16%は依存症ではないが健康を害する危険な飲酒に分類されるとアルコール依存になると

食事バランスが崩れ、体をこわすまで飲酒を続けるなどがんになりやすくなる。

また食道がんは切除しても、別の場所にがんができて、別の場所にがんができやすく、再発を防ぐには飲酒を控えるのが望ましい。

横山頭・久里浜医療センター臨床研究部長は「外科医と精神科医が連携して依存症患者の治療をすることで、食道がんの患者を減らすことができる」と話す。

(辻外記子)

H24. 9. 20